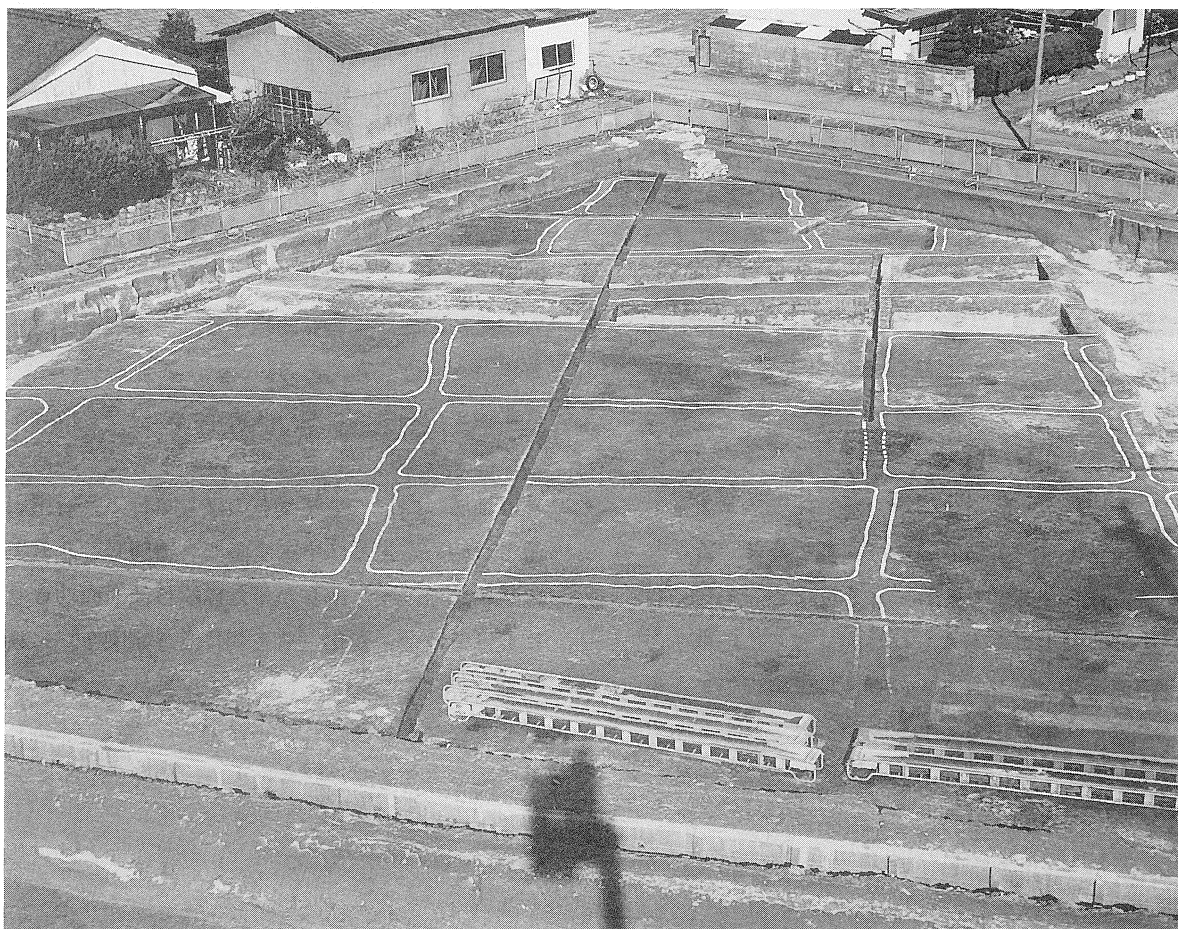


埋 蔵 文 化 財 愛 知

No. 36



大毛池田遺跡（一宮市・葉栗郡木曾川町）

大毛池田遺跡は一宮市北西部に位置し、木曾川によって形成された自然堤防上に展開する。今回の調査では、県内で初見となる古墳時代前期の水田跡が良好な形で確認され、沖積地に拓かれた当時の水田の基本的な構造に加えて、小区画水田の配置の計画性についても幾つか新たな知見を得ることができた。

調査された水田は、高さ5cm前後の畦畔によって分けられる長方形の小区画を特徴とする。恐らく地形の僅かな傾斜を利用して田越しに給水していたと思われる。また水田区画の配置のあり方では、2つのパターンが確認された。まず1つは溝を伴う幅80cm、高さ15cmの大畦畔に沿って小区画が整然と配置されるものであり、もう1つは並行する幅1m、深さ90cm程度の2条の溝によって小区画の方向が規制されるものである。

今後の調査では、両者の構造的な特徴の差異と具体的な水利施設、及び水田経営に携わった集落の究明が課題となろう。

（調査研究員 北條真木）

シリーズ ものの移動を考える 4

近世陶磁器の移動

日本の焼き物生産は、近世に入ると生産体制・器種構成などを含め、それまでの時代から比べて大きくその姿を変えて行く。ここでは近世におけるものの移動を、陶磁器を中心に流通構造の変化、陶磁器生産地の動向などから考えてみたい。

流通構造の変化

徳川幕府による支配体制は、戦乱の時代に終止符を打つ。平穏な時間の継続は交通網を一段と整備させ、各地域の特産物がこの流れにのって、遠く離れた地域にまでもたらされることになる。近世の食生活を支えた陶磁器は、三都（江戸・京都・大坂）を中心に近世都市において大量消費され、この消費がさらに流通網の整備、生産量の増加を促進することになった。具体的には、幕府による街道の整備、川村瑞賢などによる航路の開拓が行われた環境において、陶磁器生産地では窯体構造が大量生産を可能にするよう改善され、連房式登窯などで焼かれた製品が消費地へと運ばれて行くようになる。そして船足の速い樽廻船の出現がこうした傾向にさらに拍車をかけ、近世の流通構造がこれまでの時代には実現できなかった「より速く、より細かく、より遠く」といった充実した内容へと変化する。この流通構造の充実、各地域の文化をより多く接触させることになる。

焼き物の生産

近世に入ると、中世末から積極的に行われ始めた茶陶の生産に続いて、施釉陶器の生産はいっそう活発化し、朝鮮半島からの新技術導入によって磁器生産も行われるようになる。これらも戦に明け暮れた生活の終焉と無関係ではない。

この時代に至ると陶磁器の器種が格段に増えるのは、先述した流通構造の変化に呼応したものとして捉えられるのではないだろうか。つまり近世都市内において各産地の焼き物が競合することは、産地間の競争原理をより刺激することになり、商品の研究・開発にしのぎを削るようになった結果、器種が多様化することになったと考えられよう。

近世の焼き物生産地を概観すると、中世の六古窯のような多元的なものから、肥前系と瀬戸・美濃系が他の窯業地に比べて生産量で抜きん出る、二元的なものへと変化していることがわかる。こうした状況は、焼き物に対する代名詞が日本海側では「からつもの」、東海地方を中心とした太平洋側では「せともの」と呼び分けられていたことに見て取れる。

肥前系陶磁器

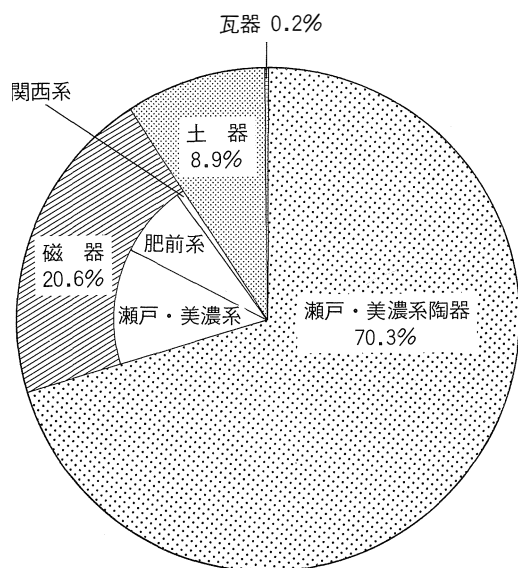
肥前系の陶磁器というのは、16世紀後半から施釉陶器の生産地として誕生した「唐津焼き」と、17世紀前半から国産初の磁器生産を開始する「有田焼き」または「伊万里焼き」のことである。

唐津産の陶器は、瀬戸・美濃系の陶器を追随するように器種構成も近似していて、瀬戸・美濃系陶器の販路以外の地域に向けて生産量をのばして行く。有田周辺で生産され始めた磁器は中国産磁器を追随し、それまで国産の窯業地では成し得なかった色絵技法を成功させ、中国における政情の変化（清王朝による鎖国令）に乗じて生産量をのばして行く。この国産磁器はやがて日常雑器として庶民にまで浸透し、唐津焼きのみならず瀬戸・美濃系の陶器までも脅かす存在となって行く。

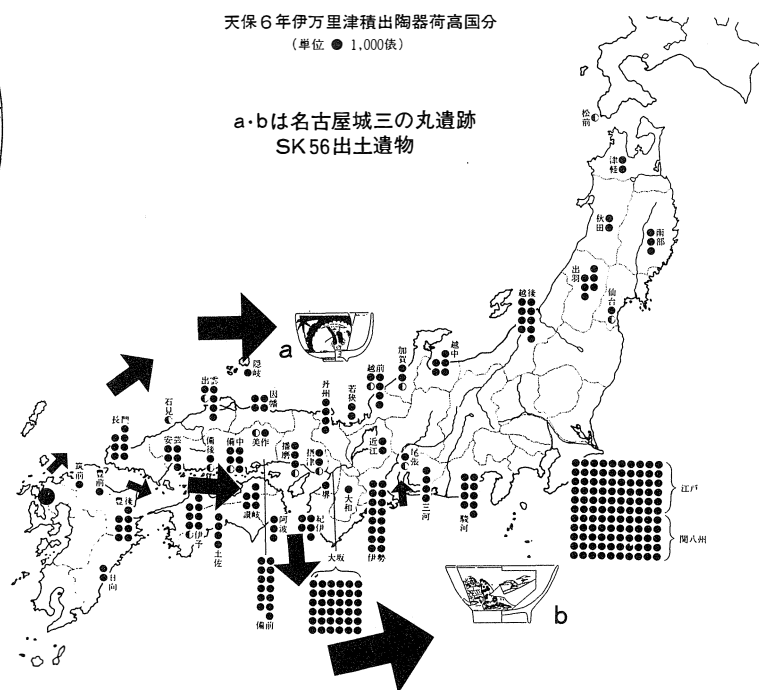
瀬戸・美濃系陶磁器

瀬戸・美濃系の陶磁器とは、愛知県の北部（瀬戸）・岐阜県の南東部（美濃）地域の諸窯で生産された焼き物のことである。

この地域は古代から現代に至るまで、日本の代表的な窯業地として知られている。美濃地域の諸窯は、中世末には大窯という新しい窯体構造の登場により、茶陶の生産地として評価される。これに続いて連房式登窯の登場により量産体制が整うと、日常雑器などが大量に焼かれ、各地にもたらされる。唐津焼きが瀬戸・美濃系製品の販路外に活路を見いだしたのに対し、肥前系の磁器はその特性を生かして瀬戸・美濃系製品の販路にも逐次進出して行く。こうした磁器の進出は、江戸中期以降には先述したように瀬戸・美濃系の陶器にも脅威となってくる。



第1図 名古屋城三の丸遺跡'90調査区
SK56出土遺物組成表
(金子健一編1992『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』
(財)愛知県埋蔵文化財センターをもとに作成)



第2図 肥前系陶磁器の流通
(前山博1984『近世伊万里焼の流通』『国内出土の肥前陶磁』)
(佐賀県立九州陶磁文化館より転載し、加筆)

それは肥前系の製品に対して瀬戸・美濃系の製品が、スタイル・絵付けの模倣を行うことに見て取れる。したがって瀬戸・美濃系の窯業地にとって、磁器生産の成功が急務となった。こうしたなか江戸時代後期に、この地域でも磁器の焼成に成功すると、肥前系陶磁器と瀬戸・美濃系陶磁器は、さらに競争を深めて現在に至るのである。

ここで近世の流通機構、生産地の様子を踏まえた上で、当地域の状況をいくつかの視点で考えてみたい。

第2図は、天保6(1835)年に伊万里港から全国に向けて出荷された、31万俵の陶磁器の内訳である。当地尾張には1千5百俵、三河には4千俵の入荷であった。注目すべき点は、近世において三都に次ぐ大都市名古屋を擁する尾張国で入荷量が全出荷量における0.5%にも満たないことである。これは地場産業である瀬戸・美濃系の窯業地がいかに大きい存在であったかということを示している。

流通状況と並立して捉えたいのは、消費地としての当

地域の状況である。第1図は、当センターが発掘調査を行った名古屋城三の丸遺跡(名古屋家庭・簡易裁判所合同庁舎地点)における、土坑SK56から出土した陶磁器の組成を、円グラフとして作成したものである。この土坑は19世紀前半から幕末にかけてのものと考えられ、これは前述の出荷内訳図とほぼ同時期である。この遺構は「名古屋城三の丸内の役宅」という、特殊な階層における居住地のものではあるが、この地域での消費状況を知る資料として取り上げた。陶器は全体の70.3%を占めるが、このうちほとんど(97.1%)が瀬戸・美濃系の製品である。磁器は全体の20.6%を占めるが、その内訳は瀬戸・美濃系が60%、肥前系が36.4%、関西系が3.6%となっていて、瀬戸・美濃地域での磁器生産が安定してからは、地元が優勢な比率を示していることが興味深い。

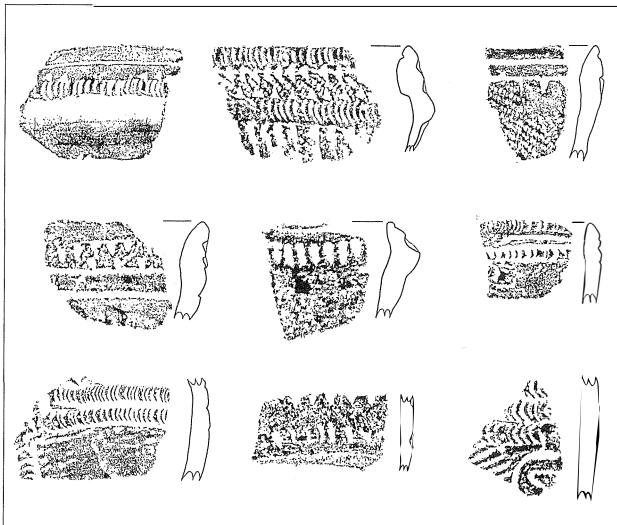
近年、発掘調査の対象は近世にも及ぶようになり、そこからは膨大な量の遺物が出土している。こうした発掘調査の成果から近世社会の復元を試みるのが、我々にとって重要ではないだろうか。(調査研究員 松田 訓)

◀遺跡紹介▶

広坪遺跡

額田郡幸田町

広坪遺跡は、額田郡幸田町大字桐山に所在する遺跡で2つの河川に挟まれた丘陵端部に位置する。本遺跡の発掘調査は、建設省名四国道 工事事務所から一般国道23号岡崎バイパス建設に伴う事前調査として委託を受け、調査面積4,200㎡を平成5年9月から実施している。



調査区は広い範囲にわたって土石流によって形成されたと考えられる溝状の砂礫の堆積層が検出されている。また、この堆積層の東西にはアカホヤ火山灰層（B・C 4,350年）を挟んだ黒色シルト層が広がっている。

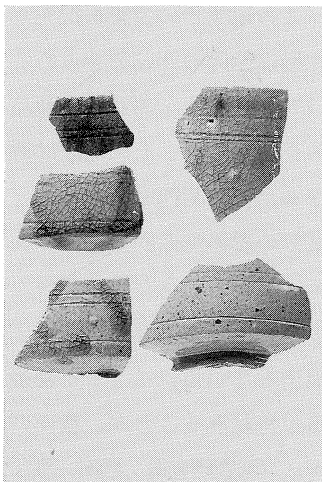
本遺跡から出土した遺物には、縄文土器、弥生土器、灰釉陶器等があるが、これらの遺物の出土位置には、ある程度の偏りが見いだされる。縄文時代の遺物は、半截竹管による隆帯爪形の連続刺突文や三角状のへら状具による連続刺突文等による文様構成を持ち、縄文中期前半に比定される。他に貝殻条痕を施したものもある。縄文土器の多くは、調査区西部に広がる黒色シルト層上部から出土している。弥生時代の遺物には、欠山式を主体とする台付き甕、壺等がある。これらの遺物は、土石流中及び調査区東部の黒色シルト層より出土している。灰釉陶器は、時期にして井ヶ谷78号窯式から黒笹90号・折戸53号・東山72号窯式まで幅広く出土する。井ヶ谷78号窯式のもののは瓶の底部であるが、他はいずれも碗である。灰釉系陶器も鎌倉から室町までの幅広い中でとらえられるが、灰釉陶器も含めてその出土数は縄文・弥生土器と比べ少ない。

（調査研究員 水谷寛明）

烏帽子遺跡

東海市

烏帽子遺跡は東海市高横須賀町に所在し、旧海岸線に平行する砂堆上に立地している。本遺跡は従来は弥生時代の遺物散布地とされており、今回の発掘調査でも調査区のほぼ全域にみられる黒褐色砂層の中に弥生時代中期後半を中心とする土器がみられ、また同じ層から製塩土器、須恵器なども出土した。

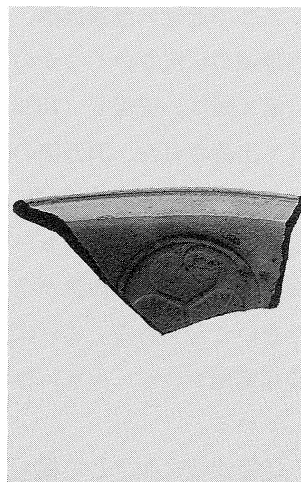


調査区の中央部付近では黒褐色砂層の上に近世と思われる盛り土が認められ、その盛り土の下部から香炉、茶入などの破片に混じって匣鉢などの窯道具類が出土した。本遺跡の周辺には江戸時代前期に尾張藩第2代藩主徳川光友によって横須賀御殿が造営されているが、

御殿を描いた絵図の中には御殿の敷地内に「瀬戸物小屋」や「瀬戸土置場」の文字がみられるものや、敷地に隣接した部分に「御カマヤキ」とするしたものがあり、横須賀御殿で御庭焼が営まれた可能性が指摘されている。発掘調査では窯跡などの遺構は検出されなかったが、前述の陶片や窯道具類は御庭焼に関わる遺物と考えられ、今まで不明であった横須賀御殿での御庭焼の実態を初めて解明する資料となろう。

また、近世の遺物の中には御庭焼に関する遺物の他に三ツ葉葵の紋様がはいった陶器片なども含まれている。今後も隣接部分の調査が予定されており、これまで文献や絵図などからのみ行われてきた横須賀御殿の研究が、考古学の面からも進むことが期待される。

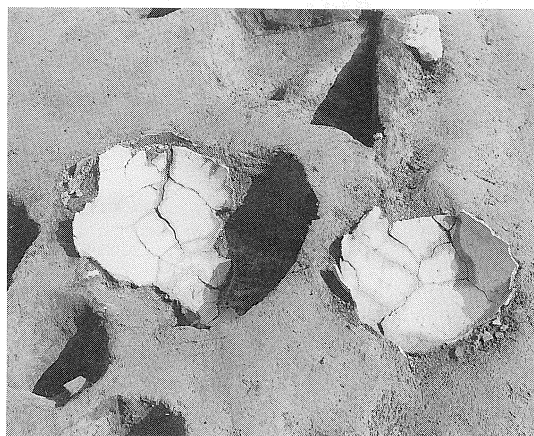
（調査研究員 余合昭彦）



◀市町村だより▶

牧平遺跡

額田郡額田町



本遺跡は、額田町南部を西流する男川に沿って形成された標高70m前後の河岸段丘及び沖積地に位置し、現在は主に田畑として利用されている。県営圃場整備事業の実施に先立ち、平成5年10月から発掘調査を行ったが、今回の調査箇所は、遺跡の中心よりやや東寄りにあることが、平成2年に実施された試掘調査から知られる。

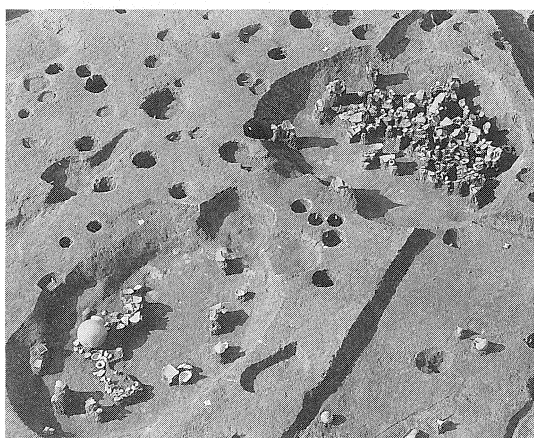
調査地区は、小川を境に2mほどの比高差をもって北地区と南地区に分かれる。水田として利用されている北地区では、弥生時代初頭に位置づけられる条痕文土器の時期の遺構(土器棺墓・土坑など)・遺物が主として見られた。

一方、畑地として利用されていた南地区では、条痕文土器期の土坑なども検出されているが、後世の削平を受け、江戸時代の屋敷地とこれに伴う遺構(井戸・土坑など)・遺物が比較的多い。

(愛知県教育委員会 磯谷和明、額田町教育委員会 宇佐美正子)

伊勢山中学校遺跡

名古屋市



伊勢山中学校遺跡は弥生時代から近世の複合遺跡で、名古屋台地西縁に立地する。今回の5次調査は、遺跡の推定範囲南東部の地点、約1,500㎡で実施したが、約300㎡が既設建物の基礎で破壊されていた。

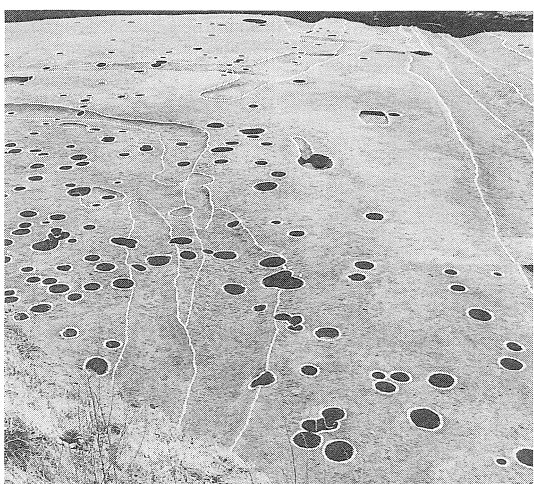
調査の結果、弥生中期の竪穴住居跡1棟と、ほとんどが古墳時代に属すると考えられる竪穴住居跡28棟を検出した。これらは遺存状態も良く、5世紀初頭の土師器が床面近くに多数散乱して出土した住居跡では、床面焼土付近より板状鉄製品(鉄鋌?)が1点出土した。その他、注目すべき遺構に楕円形(約2.5×3m)の土壇2基があり、5世紀前半代の土師器と須恵器が多数共伴した。

当地方に須恵器が導入された年代と、それに伴う器種構成の変化からみた生活様相の変遷を探るための手がかりを得ることができるものと期待される。

(名古屋市見晴台考古資料館 木村光一)

腰前遺跡

知立市



知立市上重原町字腰前に所在する本遺跡は、猿渡川右岸の中位段丘縁辺に立地している。以前より遺物散布地として知られていたが、平成4年度に実施した範囲確認調査により、9,000㎡以上の面積を有する中世の集落跡であることが明らかとなった。今回の調査は土地改良事業に伴うもので、遺跡の西側約3,000㎡が対象となった。

検出された遺構には、掘立柱建物を構成する膨大な数の柱穴とこれを取り囲む数条の溝状遺構、隅丸長方形を呈する竪穴状遺構、円形周溝状遺構、土壇墓・火葬施設などがあり、これらから山茶碗類を中心に土師器・瀬戸産施釉陶器・常滑産陶器・輸入陶磁器・加工円盤などが出土している。以上から本遺跡は、複数の屋敷地からなる13世紀代を中心とした集落跡であることが判明した。集落全体の構造や中世重原荘との関連などについて、次年度の調査を踏まえ検討していきたい。

(知立市教育委員会 岡本茂史)

ウスガイト遺跡

知多郡武豊町

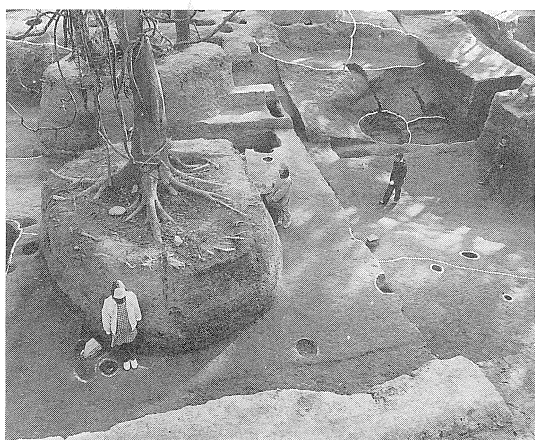


本遺跡は、知多半島の三河湾に面した標高15m前後の丘陵上に立地し、平成5年4月から6年3月末を予定に、面積22,000㎡を発掘調査している。これまでに、弥生・古墳・平安時代の住居跡が確認されているが、特に調査区全体に展開する中世の集落が注目される。

この中世の集落は、溝によって区画されたいくつかの屋敷地から構成され、溝からは埋葬されたと考えられる犬と馬の全骨格が出土し、その上部から未使用の山茶碗が大量に検出された。この山茶碗は、形態などの特長から周辺の窯で焼かれたものと見られ、工人集団と集落とを結ぶ好資料であると考えている。また、集落内で、この地域に多く産出する鬼板を使用した鑄鉄鑄造施設と思われる遺構が、ふいごやるつばに使用された土師器など鑄造に関連する遺物を伴って検出された。中世の集落調査が少ない知多地域において、集落の全貌が明らかにされた遺跡として評価されよう。(武豊町教育委員会 奥川弘成)

田原城跡

渥美郡田原町



今回の調査は城跡北端の「藤田曲輪」と呼ばれる場所で、近世には隠居屋敷、茶室等が存在したことが文献で知られている。

検出された遺構、遺物は戦国時代が中心で、近世のものは少ない。主な遺構として、戦国時代の虎口、大溝、竪穴建物等が検出されている。注目すべき点として、虎口の改修や、盛土による造成などか幾度となく実施されていたことがあげられる。遺物は、土師皿、鍋、貿易陶磁、瀬戸美濃・常滑の陶器などが大量に出土した。

現段階では、築城当時の居住性の低い空間(16世紀前半まで)から居住空間(16世紀中頃)へと藤田曲輪が変化を遂げていったことが遺構や遺物の変遷などから考えられる。今後の整理の課題は、遺構及び遺物の詳細な分析を行うことにより、田原城の構造的な変遷を解明することである。

(田原町教育委員会 増山禎之)

平成5年度普及事業

平成5年度の(財)愛知県埋蔵文化財センターの普及活動を総括します。

〈センター見学〉

博物館学の授業を兼ねて来訪した愛知学院大学歴史学科学生をはじめ、地元大藤小学校・桜小学校の6年生や愛知県の高校社会科・地学科教員など総勢約1,000名が展示施設・整理作業を見学されました。

〈遺物・写真等の資料の貸し出し〉

名古屋市博物館をはじめ8ヵ所の展覧会に総数139点の遺物を展示のため貸し出し、また、歴史関係の書物や展示パンフレットなどにのべ57点の写真が掲載されました。

〈現地説明会〉

名古屋城三の丸遺跡(名古屋市中区)・島田陣屋遺跡(新城市)・一色青海遺跡(中島郡平和町)・大毛池田・沖遺跡(一宮市・木曽川町)の4ヵ所で行われ、毎回200~400名の方々が熱心に見学されました。

〈埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会〉

新城市で開催された埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会には、のべ1,750名の来訪者がありました。

埋蔵文化財愛知 No.36

発行 平成6年3月22日
編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター
〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田
字野方802番24
TEL 0567-67-4161~4163
印刷 株式会社 クイックス